

天声人語

開発しているうちに、恐ろしくなってきたのだろうか。原子爆弾が完成し、日本への投下計画が動き出していた米国で、異議を唱えた科学者たちがいた。極秘の開発計画に従事していた彼らは、水面下で政府に働きかけを始めた▼「まずは無人の地域に投下し、破壊力を示すべきだ」とする報告書をまとめた。そうして日本を降伏させ、大量殺戮(さつりく)を避けようと考えたのだろう。一部の学者はトルーマン大統領に請願し、思いとどまらせようとした。どれも蠍(じとう)の斧(おの)だったことは、広島と長崎で起きた地獄が示している▼彼らの主張は、その先も見越していた。「核の破壊力には限界がない。想像を絶するような破壊の時代への扉が開いてしまう。核の力を最初に使う国は、その責任を負わねばならない」と当時の請願書にある。扉は大きく開かれ今へと続いている▼「核なき世界」がもてはやされたのが遠い昔のようだ。「小さく使いやすい核」の開発を進めると米大統領が言えど、「小さくとも核には核で報復する」とロシアの大統領が返す。新しい冷戦とも言われる現実である▼昨年採択された核兵器禁止条約は、核を絶対に位置づける試みである。その運動に関わる川崎哲さんは近著で、「核兵器をもつことが『力のシンボル』から『恥のシンボル』に変わったのです」と述べる。条約を認めない日本政府への痛烈な皮肉でもあろう▼開け放たれてしまつた破壊の扉。それを人間の手で閉じていく。私たちに残された課題である。